

inabe NOWTO

[inabe nauto]

「いなべ」といえば「黄色い電車」。田舎町に映えるかわいらしい電車は、このまちを代表するシンボルの一つだ。2号では、今年、開業90周年を迎える三岐鉄道を特集する。

このまちの経済発展に寄与してきたであろう三岐鉄道と私たちの暮らしには、どのような関わりがあるのか。その歴史を振り返りながら未来を紐解き、「電車」の今を考える。

後半は、「いなべをカタチづくる」と題し、今年11月に選挙を迎える「いなべ市議会議員」について。そして、コロナ禍の今だからこそ、「地元」の可能性を追求するべく立ち上がった新たな2つの事業を紹介する。

「まち」をつくるのは、そこに暮らす「私たち」。

自分たちが暮らすまちで起きていることを知り、関心をもち、必要であればアクションすること。それは、自分たちの「夢」や「未来」への道をつくっていくことでもある。



CREDIT

アートディレクション/デザイン：北佳尚己（エコムクリエーション）
デザイン：本瀬玄真（エコムクリエーション）、下村文香、山下佳苗（gramme design）
写真：浦田貴秀、松永ひとみ
議会ページイラスト：田辺勇輔
eat 結び イラスト/テキスト：川瀬知代
テキスト制作：本瀬玄真（エコムクリエーション）、伊藤理恵、桑嶋幹人、荒木愛美（グリーンクリエイティブいなべ）
プロデュース/進行：荒木愛美（グリーンクリエイティブいなべ）
企画協力：三岐鉄道、太平洋セメント、彩電館たかはし、いなべ市議会議員の皆さま、児玉美香
印刷：共栄堂印刷
企画制作：グリーンクリエイティブいなべ
発行：グリーンクリエイティブいなべ

CONTENTS

- 01 特集「三岐鉄道」
- 05 「いなべをカタチづくる」-1、市議会はみんなの声をカタチに変えるところ
- 07 「いなべをカタチづくる」-2、inabe's Shop/Mobile-HUTE
- 09 「今をしっかりと見据え、未来へ歩き出した人々」彩電館たかはし/eat 結び



「国内唯一」セメントを積んだ貨物列車が走るまち

現在、太平洋セメント株式会社 藤原工場では、年間約180万トン、1日にして約6000トンものセメントを製造。そのうち約半分は、三岐鉄道の貨車によって四日市出荷センターまで運搬される。

藤原工場長 川辺孝治さんは、「セメントを製造することと同様に、『物資を輸送する』ということが、何より重要なポイントである。セメントは量も多ければ、重さもある。三岐鉄道さんと一体となって、初めてセメントの製造運搬が可能となり、お客様に喜んでもらえる。昭和7年の生産開始以来、藤原工場の大切な出荷部門を担っていたにいたっている三岐鉄道さんとは、これまでの歴史と信頼があり、何ものにも代えがたい重要な関係である」と、三岐鉄道への想いを語る。

三岐鉄道が運搬するセメント貨車は、開業以来さまざまな改良を経て、今では2輦編成の機関車で16輦牽引することができる。貨車1輦に、セメントを40トン積めることから、1回で640トンものセメントが運搬可能だ。10トントラックであれば、64台必要になり、CO₂の排出量等を考えると、環境に優しい運搬方法であることは間違いない。また、現

在セメント輸送の他に、碧南火力発電所へ向けて、脱硫(※1)で使用する炭酸カルシウムを運搬。その復路で、火力発電所が出た産業廃棄物であるフライアッシュ(石炭灰)を積み込み、藤原工場へ届けている。このフライアッシュは、セメント原料のひとつになることから、貨物輸送は、環境に配慮した産業廃棄物処理の循環に関わる重要な役割を担っているともいえる。

「地球温暖化や脱カーボンが叫ばれる時代、三岐鉄道の機関車は電動で走るため、排気ガスを出さない。それに加え、例えば、輸送に使う電力について、自然エネルギーを活用した発電源の利用が可能になれば、脱カーボンにもつながるのではないだろうか」と、川辺工場長は、三岐鉄道との「未来」についても期待を示す。

(※1) 石炭を燃やす際に発生する硫黄分を取り除くこと。

三岐鉄道の「使命」

「ここからは、視点を現在の客車に向ける。『地元密着で90年、開業以来、とてもつながりが深いまち』いなべ。長い間、地元の皆さんに支えられてここまで来ることができた。今後も地域の公共交通機関としての使命を果たし、皆さんの交通手段を守っていく」と、渡邊社長は強く想いを語る。

「このような厳しい状況下であっても、社員はそれぞれの『使命』を持って日々働いている。現在まで、誰ひとり感染せず鉄道を守り抜いているのは、社員全員の高い意識の表れでもある。安全運行、そして、安心してお客様にご利用いただける環境を日夜整えてくれていることは、本当にありがたい」と、社員への敬意を示す。

今回、社員の中でも、特に三岐鉄道を愛し、日々己の使命を全うする、三岐運転区 副長 佐藤直志さんにインタビューした。

(次頁に続く)

このまちから、「黄色い電車」が無くなってしまった日のことを想像してみたい。

日々の暮らしに、“当たり前にあるもの”が、無くなってしまった時、やっぱり必要だった……

そう思う前に、しっかりと自分たちの暮らしを見つめ、現状のまちの課題を知り、自分なりに解決策を模索してみる。今回の記事がそんな一つのきっかけになれば嬉しい。

三岐鉄道 × inabe NOWTO Sangi RailWay 90th Anniversary.

2021年「現在」、世間はコロナ禍。三岐鉄道をはじめ、鉄道業界はどこも闇夜の中だ。特に昨年の春、沿線の学校が休校になった関係で、通学定期券の払い戻しが多数あり、三岐鉄道は多大なる影響を受けた。同年秋頃に実施されたGoToキャンペーンで、一時持ち直したかのように見えたが、年明けから各地の移動自粛要請を受け、追い討ちをかけるかのように乗車数は激減。世間の電車離れは、想像以上に進んでいる。

今回は、さまざまな視点から、三岐鉄道の「未来」を紐解いていこうと思う。

カワイイ、田舎町に映える黄色い電車……という、若い世代の誰かが抱いているであろうイメージを超えて、その奥にある本来の姿と、今の状況を知ってもらいたい。

あなたがもし、何らかの状況で車を運転することができなくなってしまうたら、目的地まで向かう交通手段は何を選ぶだろうか。未来はあつという間にやって来る。だからこそ、「電車」の必要性を改めて考えてみて欲しい。

付けた会社があった。現在、藤原町に工場を持つ小野田セメント(現太平洋セメント)と、浅野セメント(現太平洋セメント)である。小野田セメントは、藤原町の東藤原に工場を建設し、そこで生産されるセメントを富田や四日市に運ぶため、「員弁鉄道」を計画した。一方で浅野セメントは、藤原町の西藤原から石灰石を採掘し、それを新しく四日市に建設する工場や関ヶ原(岐阜県)に運ぶため、「藤原鉄道」を計画した。このため、小野田セメント側の員弁鉄道と、浅野セメント側の藤原鉄道が開業免許取得のため競合することになり、窓口の三重県知事を悩ませたという。その後、両者の意向を汲み、鉄道の敷設を一本化することで決着。三重県と岐阜県を結ぶ計画のもと、昭和3年9月20日に「三岐鉄道株式会社」が設立された。

翌年、東藤原駅⇌丹生川駅間から建設工事が開始され、昭和6年6月23日に東藤原駅⇌富田駅間23.1キロメートルが完成。その翌月、7月23日に運輸営業を開始した。

今年、開業90周年を迎えるにあたり、三岐鉄道代表取締役社長 渡邊一陽さんは、「ただ列車を走らせるだけではなく、沿線に暮らす人たちにとって、やはり鉄道があるというこ

とは「良い」と思っていただけでなく、ご利用いただきやすい環境を常に考え、整えていきたい。『大量輸送』『安全性』『定時性』『環境配慮』、これらを存分に発揮できるのが、電車の役割だと思う。その役割を十分理解した上で、三岐鉄道では、安全安心に誰もがご利用いただきやすい鉄道を今後も目指していく」と、未来を見つめる。





「好き」からつながった、 三岐鉄道との「縁」

三岐鉄道 保々駅横に隣接されたCTCセンターで、列車の指令や乗務員の点呼業務を行う佐藤直志さん。平成20年に入社し、今年で勤続13年目を迎える。

神奈川県で生まれ育った佐藤さんは、幼少期から貨車が大好きで、操車場で一日中眺めていたという。大人になり、全国を旅しながら貨車の写真を撮ることが趣味となり、偶然出会った鉄道雑誌で三岐鉄道を知る。当時（2000年〜2002年頃）三岐鉄道は、中部国際空港建設にあたり、太平洋セメント藤原工場から四日市港に向けて一日10往復、藤原岳の土砂輸送を実施。2年半で474万トンもの土砂を輸送した。貨車での輸送が全国ではここだけだったこともあり、佐藤さんは何度も撮影に訪れたという。加えて山も空気も綺麗なこのまちに惹かれ、三岐鉄道の入社試験を受けることに。結果は見事合格！三岐線東藤原駅での貨車入換業務等を経験後、運転士試験にも合格。幼い頃からの夢を、この地で叶えた。

小さい頃からずっと、「外」から眺めてばかりいた貨車。けれども、「中」から見る景色はやはり格別だという。

三岐線丹生川駅を出て、三里駅までに向かうカーブでの後方確認の際、運転席から外へ目をやると、全長200メートルにもなる16



ざ抜けたとしても、今の時代、「電車に乗ってもらうこと」は本当に難しい。だからこそ、ただ電車に乗ってもらうだけでなく、+αのソフト面を考察したいと佐藤さんは話す。

「このまちは、美しく豊かな自然はあるものの、沿線に有名な観光地がある訳でもない。例えば、降りたその駅で、地域の魅力やスポットを提案し、出向いてもらう『きっかけ』をつくりたい」という。

自分の「好きな仕事」を本気で守り抜くために。そして、共に働く仲間のために。三岐鉄道を利用する全ての人の信用を失わないように。熱い想いを胸に抱き、今は耐え、ただただ走り続けている社員がいることを、一人でも多くの人に知ってもらいたい。

昭和40年代の旅客列車がもたらす時間と空間

三岐鉄道の客車は、昭和40年代に製造されたものが大半である。約50年経っているとは思えないほどに、車体が鮮やかで美しく、また、車内空間が懐かしさを感じつつも快適なのは、整備士の皆さんが、毎日丁寧に保守業務を行っているからである。加えて、緻密な点検業務を日夜365日絶えず行い、安全運行を死守している。

電車に乗り、どんな音楽を聴こうか。踏切の音や、走る音に耳をすましながら四季折々の美しい景色を楽しむのも良いだろう。目的地まで、どんな本を読もうか。ゆったりシートに腰掛け目的地まで眠っても良いだろう。三岐鉄道ならではの空間で、「あなただけの電車時間」を考え、過ごしてみたい。

電車は、まちの魅力である

朝陽が昇る頃から、夜は日が変わる手前まで、三岐鉄道は休むことなく毎日走る。

街灯もない真っ暗なこのまちを、ヘッドライトひとつで煌々と照らし、客車の灯りだけが暗闇に浮かび上がるその姿は、まるでパト

輻の貨車が列を成し、その背後に藤原岳が見えるという。貨車の魅力に「力強さ」を掲げる佐藤さん。たった一人、運転台に座る運転士のみが見ることのできる景色に、「改めて、この仕事に就いて良かった」と、胸が熱くなったという。

心底、鉄道が好きな佐藤さんだからこそ、日々感じる想いは人一倍である。

今は力を蓄え、ぐっと耐えるとき

三岐鉄道に入社する前、スーパーの八百屋でチーフを務めていた佐藤さん。その八百屋で、今に通ずることを学んだという。

「近くに競合店ができた……しかも、そこで特売が開催されるらしい！」
このような厳しい状況下であっても、鮮度を落とさず、売れ筋を無くさないよう、お客様の信用を守ることだけを意識し続けた。「必ず将来、こちらが優勢になる時が来る。今は耐えて、その時が来たら打って出る！」そう、教わったという。

「だから、『今』は耐えて、耐え抜くのみ。パネで例えると、今はギョツと力を蓄えて、打って出る時に、力を思いっきり解放するような感じ。ただ、どこまで耐えられるのかは分からない。未来が見えず、退職を考える人がいるのも事実。今の自分の立場で、彼らに『将来は大丈夫だから！』と伝え、明るい会社をつくっていくためには、どうしたら良いのかと、最近よく考える」と、佐藤さんは話す。

「今の状況がいつまで続くか分からない。だからこそ、ささいなミスや事故を起こして、地元にとって向かわるのではなく、基本に忠実にしっかりとやっていきたい。コロナが収束に向かう頃、『安全で安心な鉄道だから、どうぞご利用ください！』と、声を大にして皆さんに強く言いたい。鉄道の信用度を上げるためにも、『今』がその土台を改めてつくる時だと思う」と。ただ、コロナのトンネルをい

ロールに出かける、心強い用心棒のようだ。

このまちでこれからも走り続けるであろう、三岐鉄道。闇夜を抜けたその先に、黄色い列車が眩しいくらいに映えるほど、美しい青空が広がっていることを心から願う。



文・グリーンクリエイティブいなべ 荒木 愛美

取材協力

三岐鉄道株式会社 代表取締役社長 渡邊 一陽氏
三岐鉄道株式会社 三岐運転区 副長 佐藤 直志氏
太平洋セメント 藤原工場 工場長 川辺 孝治氏

参考文献

『三岐鉄道の車輛たち―開業からの50年―』
（南野 哲志・加納 俊彦）

『貨物鉄道博物館OFFICIAL GUIDEBOOK 第3版』
地域活性化に地方鉄道が果たす役割



三岐鉄道掌編小説

三岐鉄道をテーマにした小説を GCI WEB で公開します。
三岐鉄道にまだ乗ったことがない人も、小説を読んで乗車気分を味わっていただくと嬉しいです。



<https://www.inabe-gci.jp/>

市議会は みんなの声を カタチに 変えるところ

いなべの未来に大きく関わる重要なモノ、コト、トキ。
私たちにどんな強い想いがあったとしても、市議会で議決されなければカタチになりません。
その議決権を持つのは、市民から選ばれた「市議会議員」だけ。志を持ち、市民の皆さんの声に耳を傾け、公平にまっすぐ信頼に応えようと、日々活動しています。
市議会はまさに、みんなの声をカタチに変えるところ。
市長・市議会という二元代表制のもと、議員同士の討議^{※1}を重ねて議決をしています。

私たちが、市議会や市議会議員の役割を理解して、関心を高めれば高めるほど、私たちの暮らしや、市民活動もさらに充実したものになるのではないのでしょうか。

(※1) 結論を出すため、互いに意見を出して検討あうこと。

市議会議員は、こんな人！

「市議会議員って私にはとてもムリ」と、思い込んでいませんか？
市議会議員になるには、学歴も実績も肩書も関係ありません。一定の要件を満たせば、誰でも市議会議員選挙に立候補できます。あとは、選挙で市民の賛同を得て当選するかどうか。チャンスの扉はいつも私たちに開け放たれています。

市議会はまちの方向性や、私たちの重要な行政サービスを議決する機関。だからこそ、市議会議員は議決する際に、さまざまな角度からいなべ市全体を見て、公平に判断します。いわば、市民の皆さんのために尽力する人なのです。

下記などの要件を満たせば
誰でも立候補できる!!
学歴・資格は関係ない

Japanese Nationality 日本国民
3+ months 3ヶ月以上いなべ市内に住所がある
25+ years 満25歳以上
30万 YEN 供託金として30万円必要



議員をやっていてよかったこと、やりがい、つらいことは？

地域の皆さんの願いや困っている声を市議会で発言したり、行政側に提案したりして解決や改善すると、議員をやっているのがよかったなあ、と思う。また、市民の皆さんの代表として行政をチェックするのもやりがいを感じる。議員の仕事は可視化出来ない部分も多く、議員及び議会不要論が一定数あるのも事実であり、辛く思う。また、正確な情報が伝わらないで誤解されると悲しい。

議員のなり手が少ないといわれているが、課題と思われることは？

議員報酬が少ないのがホンネ。子育て世代や働き盛りの人が議員報酬だけで生活するのは厳しいと思う。選挙で当選しなければ継続できない不安定な仕事。市議会や市議会議員の仕事がどういものなのか知られていないのも、議員の担い手が少ない原因の一つ。市議会と市議会議員の仕事や役割をもっと市民の皆さんに知ってもらうことが必要だ。

議会活動のこういったところを、市民の皆さんに注目してほしいか？

市議会では議会だよりの誌面を改善したり、いなべ FM で議会の録音を配信したりするなど、情報発信に努めてきた。議会の一般質問で、議員は市民の皆さんの気持ちや考えを述べて、その提案で市の困りごとが改善している部分を見てもらえると嬉しい。市政や議会を自分ごととして捉え、その結果として選挙に行き、自分の意思で投票していただきたい。

※市議会議員に無記名アンケートを実施し、その回答を元に作成

市議会議員のホンネ

市議会とは

市議会は、条例や予算を定め、重要な事項を決定する「議決機関」。それに対し、議会の議決をもとに、自らの判断と責任において事務を管理し、執行する市長は「執行機関」と言います。地方自治では、この両者を私たちが直接選挙で選ぶ二元代表制という仕組みになっています。市議会は、市長と緊張関係を保ちながら、市政を監視・チェックし、議決をとおして市民の皆さんの意見を反映しようと活動します。



議会審議の流れ

- 1 市長が市議会に議案を提出。提案理由を説明する。
- 2 委員会^{※3}で、行政の担当部署から詳しい説明を受けて審査。
※3 議員が所属する委員会に分かれて職員から説明を受けて審議する場合
- 3 再び本会議へ。委員会が審査したことを委員長が報告し、採決を実施。本会議に出席した市議会議員の過半数が賛成すれば可決となり、執行される。

私たち市民と市議会との関わりについて

ぜひ知ってほしい！【陳情・請願】

行政の仕組みや制度で市民の皆さんが困っていることや、「こうしてほしい」と思うことについて実情を訴え、対応を求める方法として、市議会へ陳情書や請願書を提出する制度があります。陳情と請願の大きな違いは、提出する文書に市議会議員の紹介をつけるかどうかです。「請願」は、憲法で国民に保障された権利。紹介議員が必要で、提出されると議案と同じように内容を審査します。そして、議会で採択^{※2}されると、その実現を執行機関に働きかけます。「陳情」は請願と違って、紹介議員を付けずに提出します。また陳情が提出されたら、その写しを各議員に配布してどのように対応するのか検討します。陳情と請願について詳しくは、いなべ市議会のホームページ、もしくは議会事務局までお願いします。

(※2) ある意見や案などを、よいものとして選び取ること。

市議会議員は「私だけの味方」でなく「市民の皆さんに公平な代表者」

いなべ市議会における最高規範として制定されている「いなべ市議会基本条例」第5条では、議員は活動の原則として、「公平かつ公正な市政」へと発展するために討議を大事にして、議会での合意を形づくっていくことなどが示されています。また同じく「いなべ市議会政治倫理規程」第3条では、「常に市民全体の利益の実現を目指して行動すること」と表記。つまり市議会議員は、公平性を欠いて誰かが個人的に有益となるように働きかけることはタブーです。私たちがそのような意図を含ませて、市議会議員とは関わらないように、高い意識を持つことが必要です。時に議員は、市民の多様な意見を知らうと個人に話を聞く機会があります。しかし、聞いてくれたからといってあなただけの味方ではありません。常に公平な目線で、私たち市民全体を考えて動く人なのです。

【いなべ市議会議員選挙の選挙期日（投開票日）】令和3年11月14日(日) 【期日前投票の期間】令和3年11月8日(月)～11月13日(土)

いなべのモノ×コト×ヒト×トキが
出会う場所 ヒュッテ



inabe's Shop

2021年4月、「にぎわいの森」の一角に新たなお店が仲間入りしたのをご存じだろうか。爽やかに風が吹き抜けるテラスとミニマムサイズの二棟の山小屋（ヒュッテ）、inabe's Shopだ。ストリートすぎるネーミングの通り、説明不要の「いなべのお店」である。

本誌inabe NOWTO*そして、にぎわいの森を企画運営するグリーンクリエイティブいなべ（GIC）が、理念を反映させてカタチにしたアンテナショップだ。自然、里山、農産品などの資源が持つ価値を独自の感覚（ローカルセンス）で磨き、都市とは異なる形で人々を魅了し輝かせることが、その理念である。

北勢町阿下喜の手つかずだった森を整備し、自然環境が持っている機能を活用してSDGsの拠点としても機能している、にぎわいの森。空に向かって逞しく伸びる木々、季節ごとに変わる花や緑の香り、森周辺に生息する生き物の鳴き声、時には木漏れ日がきらめき、時には日差しが眩しく、時には雨に濡れ色彩をより鮮やかにする小径……様々な表情を満喫しながら散策し、訪れる人が思い思いにすごせる場所だ。コロナ禍にあっても、四季を肌で感じる開放的な屋外空間と各店舗の温かみのある接客や営業努力のおかげで幅広い世代の人で賑わっている。メディアで取り上げられることも多く、いなべ市の新名所になりつつある「にぎわいの森」だが、「いなべ」そのものを感じられるラインナップが不足気味であった。

そこで登場したinabe's Shopの前身は、いなべ市役所シックコア棟の一角に設けられていた、いなべ市の魅力を紹介するブースである。シックコア棟は、知る人ぞ知るなかなか便利

な場所なのだ。誰もが使いやすい綺麗で広いトイレがあり、キッズスペースが設けられ、ちょっとした打ち合わせにも使え、平日にはお得なランチが食べられる。そしていなべ市のオスメスボットの情報が得られる観光案内所のようなブースがあり、ワークショップを開催することもあるのだ。屋内空間であり天候に左右されないメリットがある一方で、にぎわいの森を訪れる人の目に触れる機会が少ないこと、市役所の施設内という制限があることがネックとなっていた。

ヒュッテとして新たに誕生したinabe's Shopは、市内に点在するいなべの「おいしい」「たのしい」の窓口となって、地域産品の紹介をしている。いなべを彩る品々の、生産に至る歴史や想いまで丸ごと届けたいという情熱がこめられており、inabe's Shopから、さらにその先にストーリーが続いていくことを願っている。



地元の特産品であるお茶や蕎麦、木にまつわる商品、老舗の和菓子、地元産の卵を使った人気の洋菓子、石臼トンネルで繋がる東近江市のオスメ商品などが向かって右側の棟に並んでいる。店舗内は狭いものの、開放的なテラスと一体化しているため窮屈な雰囲気は無く、来店者は少人数ずつ順番に買い物を楽しんでいる。ある意味では昔ながらの〈商店〉のようなスタイルだ。

左側の棟は、休憩所として、また限定ショッ



inabe's Shop information
いなべ市北勢町阿下喜31 にぎわいの森内
【営業時間】10:00～16:00 【営業日】土曜日・日曜日・祝休日 【電話】0594-72-7705

プとして、そのコンパクトさを活かしてフレキシブルに活躍している。

現在は、土・日・祝日と営業日は限定的であるが、GICの想いはどこまでも広がっている。WEB（にぎわいの森公式HPやInstagram参照）や誌面にて、いなべの魅力を日々発信しているGICだが、この場所を人と人をもっと直接的に繋げる活動拠点にしていきたいと考えている。今後は、市内の既存店舗や商品をより一層輝かせるリブランディング、新たな名産品の開発や発掘いなべを肌で感じる体験会の企画、さまざまな分野で活躍する人を講師に迎えたワークショップの開催など、実現に向けて広く深く準備を進めているところだ。

場所や人や物の情報が、どこにいても手に入る時代、さらには、新たな生活スタイルへの転換を余儀なくされている今だからこそ、コミュニケーションをもっと大切にして、特別な価値や感覚を楽しんでほしい。そして、inabe's Shopというヒュッテで、いなべのモノ・コト・ヒト・トキと出会い、物語に新たなページが増えていく瞬間に、ぜひ立ち会ってほしい。

Credit

取材・執筆 / 伊藤 理恵

いなべ市内で家族と共にほぼどワイルドに生活しています。人と話すこと、表現することが好きです。心地良いいなべ暮らしの日々の中で、inabe NOWTOを通じて、素敵な出逢いと経験を得ました。

撮影 / 松永ひとみ

隣町で写真館スタッフをしています。自然、古墳、苔、クラフトなどが好きです。休みの日に撮影で通うたび、いなべに魅せられ、inabe NOWTOを知り、スタッフの方たちにお世話になりながら、貴重な体験をさせて頂きました。



[inabe's Shop]ページは、創刊号での募集記事を見て応募くださった、おふたりと共に作りあげました。

にぎわいの森では、毎週日曜日に地域の人たちが出店し、地元の素材を使った品やいなべならではの手作り品の販売、ワークショップなどを行っている。

出店者は、にぎわいの森ホームページで随時募集。「自分の特技を生かしたい」「チャレンジしてみたい」という方はぜひチェックしてください。



日曜マルシェ
【開催日時】毎週日曜日 午前10時～午後4時



"I'll Be there"
(そこに行くね)が、カタチになった

いなべSDGsを代表するショーケース

いなべ市は、2020年7月、内閣府からSDGs未来都市に選定。そのモデル事業の一環としてダイハツ工業といなべ市、グリーンクリエイティブいなべ（GIC）がタッグを組んで軽トラックの荷台部分に、ジャストサイズで収まるこの屋台ユニットを5台、開発中だ。



軽トラックさえあれば誰でも場所を選ばずに出店できて、しかもオシャレ。次世代のSDGsプロモーション用ショーケースとしても注目を集めている。

これまで市内各地や大都市に出店して、話題に

Mobile-HUTTEの実証実験を開始したのは、今年の2月。藤原町篠立の立田公園で開催された「山辺アクトイビティ未来体験」でMobile-HUTTEを並べ、来場者は各屋台を巡っ

て、カジュアルで非日常のひと時を満喫した。

その後も各地で出店を続け、ついには名古屋のど真ん中、ミッドランドスクエアにも出現。にぎわいの森のメンバーが売り手となり、いなべの食材で作ったテリーヌサンドや果実ソーダを販売した。すると、Mobile-HUTTEが醸し出す、いなべならではのノスタルジックでカジュアルな趣が、都市住民の心をわしづかみ。私たちの大きな自信にもつながった。

現在も地元では、野菜の販売やワークショップなどにも活用され、行く先々でにぎわいが生まれている。販売以外にもアート展示やワークショップでの活用など可能性は無限大だ。もしかすると、ここから新たな生業が生まれるかもしれない。



コロナ時代の新しい商売のカタチ
(ユニーノーマル)

「いつでもどこでも出店できる」
Mobile-HUTTEの魅力は、それだけではない。

将来は一般貸出へ

Mobile-HUTTEは現在、実証実験の段階。GICが仕様の異なる5台の車両を運用し、市内外のイベント出店や都市部でのデモキャラバン活動といった実践をしながら、1年程度かけて車両設備及び運用方法を検証している。これらの検証を繰り返してフィードバックしながら、2023年度以降に一般への貸し出しを目指す予定だ。

みんなと一緒に、次のステージへ。
いなべの夢が詰まった屋台は、未来へと動き出している。

文・グリーンクリエイティブいなべ



今をしっかりと見据え、未来へ歩き出した人々

彩電館たかはし

80年の歴史、受け継がれる想い。

——高橋ラジオ店の創業から約80年とのことですが、まずはお店の成り立ちを教えてください。

高橋利尚さん（以下、高橋） 高橋ラジオ店は祖父が創業者です。もともとはタクシー業を営んでいたらしいのですが、タクシীর営業ルール変更に伴い、業種を変えてラジオの組み立てを始めたそうです。それが昭和一桁台のことです。ちなみにこれは地元の方が書かれた日記で知ったことなのですが、阿下喜で最初の白黒テレビを販売したのが祖父だったようです。

——きつと大ごとですよ。テレビが希少な時代のことですから。

高橋 そうですね。テレビが各家庭に普及するまでは、一台のテレビにご近所中の人が集まって見に来ていたようです。当時は受信環境が悪くて大阪からの微弱な電波しか拾えなかったようで、祖父がお客様宅の屋根に登ってアンテナを持ちながら、電波を拾える位置をあっちでもないこっちでもないと探していたらしいです。時代を感じるでしょ（笑）

——活気ある商店街の様子が目に浮かびます。「まちに根付くお店」といった感じがします。

高橋 お店だけでなく僕自身も、阿下喜の方に見守られて育ったんだな、という感じがします。

Interview
Takahashi Toshikisa



ます。いまだにお客様から、僕が子どものころの話をされることがよくあります。

——高橋さんご自身の歴史もお伺いしたいです。

高橋 でんき屋の子どもでしたから、最新の家電に触れる機会がたくさんありました。幼いころ、ポータブルレコードプレイヤーでソノシートに入った曲を繰り返し聴いていたのを強く記憶しています。それがきっかけなのか、今でも音楽は大好きです。学生時代はバンドも組んでいました。ロック、大好きです。

——お店を継ごうと決心されたのはいつ頃でしょうか。

高橋 大学を卒業して実家に戻ってきた時です。父に「この店は続けられるのか」と聞いたことがあるんです。すると父は、「電気製品は使えば壊れる。その時に、新調するのはなく直してあげるお店はこれからも絶対に必要だ」と答えたんです。それですんなり、じゃあやってみようかなと思いました。あの時の父の言葉は、お店を続ける中でもっとも大切にしていることの一つです。電気製品は暮らしと密接に関わるものだから、ホームドクターのようにお客様に寄り添えるお店が必要なんです。ここ阿下喜では彩電館たかはしが、その役割を果たす一翼を担いたいと考えています。

阿下喜で続ける意味、まちと人への想い。

昭和初期、大戦の影響著しい日本で、ラジオの組み立てを始めた「高橋ラジオ店（現・彩電館たかはし）」。
80余年の歴史の中で生まれた、まちや人とのつながりなどを、店主・高橋利尚さんに伺った。

——地元である阿下喜でお店を続けることについて、その想いを伺いたいです。

高橋 「自分が生まれ育ったまちである」というのは大きいですね。お客様とお話をする中で——それこそ、半日くらい雑談をすることもありますが、その中で、自分の知らない阿下喜の姿やここで暮らす人の想いをたくさん知ることができました。それで「やっぱり阿下喜はいいなあ」と。それで自分も阿下喜の一員として、生まれ育ったまちにできることがあるのかもしれないと思いました。

僕は今年で51歳になりましたが、体が動く限りはでんき屋を続けようと考えています。あと20年でお店は100周年。その頃には僕は70歳ですが、まだまだがんばっていると思います。

いなべ市と彩電館たかはしの「NOW TO」

——いなべ市やご自身の将来について、展望や想いをお聞かせください。

高橋 「人が住み続ける」ということが第一に重要だと思っています。いなべ、というか阿下喜だけを見ても、ここ10年で色々と変化があったかと思えます。いなべ市庁舎の新設もありましたし、いなべ市民の中で何か新しいことをやろうという動きが見えるようになってきたと感じています。その影響でいなべに移住してくださる方も増えていますが、そうですね。そういった動きがある中で、彩電館たかはしとしてはまずお店を続けること、そして

困っているお客様に寄り添うことが、生まれ育ったまちへの一番の貢献だと考えています。これまでの歴史とこれから始まることとうまく融合することによって、このまちは良くなっていくんだと思うようになりました。

——一人ひとりの想いがまちを良くしているとも言えますね。

高橋 そうですね。この仕事を長くしていると、お客様の暮らしや生活、それらに紐づく想いが見えてきます。僕はそれを人の「情」だと思っているのですが、僕の仕事はその情に助けられているんだと感じます。また、その情を繋げていくこそが、僕の役目であり、人生だと思っています。言い換えれば「でんき屋が人生」ということになりましたね。

——高橋さんが紡ぐ、お店といなべのこれらをもっと見たいと思うようになりました。本日はお忙しい中、本当にありがとうございます。



彩電館たかはし

いなべ市北勢町阿下喜1436番地
営業時間 / 8:30 ~ 19:00
定休日 / 水曜日
TEL 0594-72-2232

（取材・本瀬玄真）

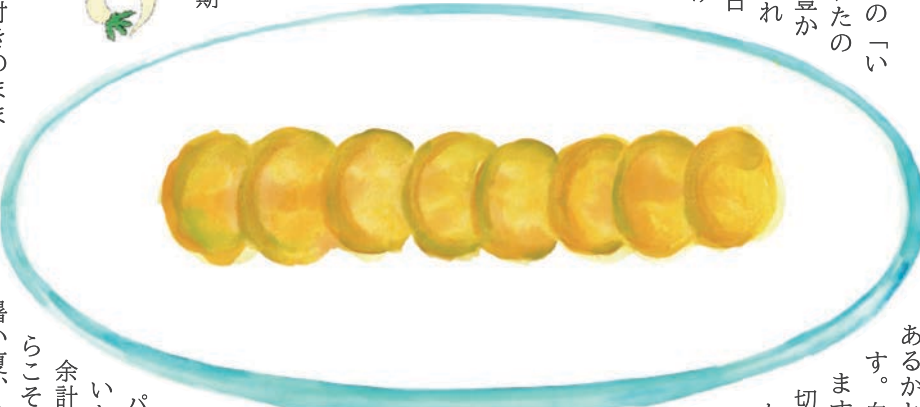
はじめまして。

今回から始まりました「eat 紡ぎ」は、「糸紡ぎ」のようにいなべで生活されている皆さまの、ご家庭に受け継がれている味・お料理などを教えて頂き、私なりに解釈し、皆さまにご紹介するという企画ページです。

私ごとですが、去年、東京から生まれ故郷の「いなべ」に戻ってきました。いなべを離れたのは10代、その頃は、このいなべの食の豊かさにも何も気づいていませんでしたが、それから歳を重ね、自分の家族もでき、毎日食事をする中で、この豊かさがどれだけ幸福なものかが身に染みて解るようになりました。それらがなくなることなく若い世代にも繋げて広がりていけばと思っています。

第1回は私のルーツである母にお願いしました。数ある母のお漬物レパートリーの中から重鎮であり別格の存在感（独特の香り）を放つ「たくあんのひね漬け」を伝授してもらいました。「ひね漬け」とは、通常より2〜3年長く漬けた状態のたくあんのことで、漬け方はたくあんと同じです。残念ながら今は漬ける時期ではないので、今回は母の漬け方を教わり、すでに漬けて出来上がったものをいただきました。（今年私は私も漬けてようと思います！）

たくあん漬け用大根を12月に収穫し、葉付きのまま洗って2週間以上干しておくと大根がクルンと丸まってきました。ヒゲと葉を切り落とし、材料と共に順に桶にピツピツ重ね詰めていき、重しをドン、ひと夏置いて秋以降は後1〜2年そのまま漬けておきます。3年ものは、ひと口かじれば、じわーっと年月が滲み出てくるような熟成された旨味としょっぱさと



川瀬 三代 さん

栄養士として40年働く退職後は畑仕事を趣味とし、野菜・料理・手芸と常に何かを作っている創作力溢れる人
好物 / パン

川瀬 知代

イラストレーター／アーティスト
個展など発表の他、アパレルや書籍などにて絵を描く「粒粒」の名で食にまつわる活動を行う。2020年末に故郷いなべに拠点を移す

独特の甘さがありとにかく濃い！たくあん1年ものすらフレッシュに思えるほど、ひね漬けは、ぎゅーっと詰まった味がします。我家の法事では、皆さんに食事をしてもらう際に数種の漬物の鉢が並びます。たくあんだけでも何種類も。切り方も変えて、輪切り・拍子切り・みじん切りにしてゴマと混ぜたもの。人によって好みはあるかと思いますが切り方が違うと味も変わります。白米と食べるとお米の甘さがより感じられます。お酒のつまみに拍子切りをポリポリと食べ、またたくあんのご飯でみじん切りとなんて流れもあったり、「コレが好きなんやわ」と帰りにお土産（袋二重）に持って帰ってもらうのがお決まりです。たしかにスーパリーやお店では甘い黄色のたくあんは売ってませんがアレはアレ。全くの別モノです。この味はたくあんを漬けている家にしかないのです。（お家によっても多少違うでしょう）しかし、今はたくあんを漬けるご家庭も少なくなったので、「ひね漬け」は幻の一品となりつつあるのかも知れません。

日常、食卓に並ぶ器やタッパーの中で、ひね漬けの入れ物のフタは常に閉められています。欲しい人が食べる時だけ開けてパツと取ってサツと閉めたり。やっぱり臭いなあと言われながらもコレがあるとご飯が余計に入ってくるわあ♡と箸が進んだり。臭いからこそ癖になる。やめられない味。暑い夏、食欲のない時には冷たいおそうめん、ひね漬けのみじん切りと薬味をたくさんかけて食べるというアレンジもいいかもです！漬けておけば、いつでも出しても食べられる（蓋はされませんが）究極の常備菜とも言っても過言ではないのではないのでしょうか。



いなべ市からのお知らせ

続

Hyggeの
[ヒュッゲ]
2021 秘宝を探せ！

いなべ市全域を巡るスタンプラリー「Hyggeの秘宝を探せ！」が再び開催！まちづくりの拠点「にぎわいの森」から市内観光スポットを回遊できる3ヶ月間。家族や仲間を誘って豪華な秘宝をGETしよう！

スタンプラリー開催期間
2021 7/16 [fri] — 12/28 [tue]

三岐鉄道に乗ろう！

北勢線「楚原駅」、三岐線「東藤原駅」もスタンプラリースポットになっています！ぜひ、この機会にご乗車ください。
※スタンプを押すためには、入場料または、運賃をお支払いいただく必要があります。

参加方法
詳しいご案内はこちら



https://www.inabe-goaround.jp/
※PC・スマートフォン等からアクセスできます。

募集

No.1 inabe NOWTOでは、共にこの媒体をつくってくださる方を募集しています。

どんな形で関わっていただけるかを明記いただき、ご応募ください。
（例）カメラマン、ライター、イラストレーターとして関わられる... など

No.2 inabe NOWTOで取り上げて欲しいこと。

No.3 「eat 紡ぎ」企画では、いなべで暮らす皆さまの、ご家庭に受け継がれている味・お料理などを教えてください。ご家族に受け継がれている味・お料理などを教えてください。

（例）ご飯のお供（おかず、お漬物、汁物）、甘味（和菓子、洋菓子）、調味料（お味噌、醤油）、お節の一品、生産者さんだからこそ知る美味しい野菜の食べ方... など

応募先

① メール info@inabe-gci.jp
② 郵送または持ち込み

〒511-0428 いなべ市北勢町阿下喜31番地 いなべ市役所 2階
グリーンクリエイティブいなべ事務局
※持ち込みの場合の受付時間：平日 9:00-17:00

【お問い合わせ】
（一社）グリーンクリエイティブいなべ TEL：0594-72-7705